



伊賀寺遺跡の 縄文遺物

長岡京市の南部に位置する小泉川流域では、近年の京都第二外環状道路工事などに伴う発掘調査の進展によって、縄文時代の集落に関する遺構・遺物が相次いで発見されています。特に、下海印寺地区の伊賀寺遺跡では、今から4500～3500年ほど前の住居や墓などが見つかるとともに、縄文土器や石器、玉類など様々な遺物が多数出土するなど、注目される成果が得られています。

今回の展示では、伊賀寺遺跡で出土した各種の遺物から、当時の物の製作と移動について考えてみたいと思います。

展示期間：平成22年10月5日（火）～12月26日（日）＊図書館休館日は除く。＊期間中、一部展示替えを行う予定です。

い が じ 縄文時代の伊賀寺遺跡

小泉川流域では、下流から下植野南遺跡、砦遺跡、友岡遺跡、伊賀寺遺跡、下海印寺遺跡、奥海印寺遺跡などの縄文時代の遺跡が数多く分布していて、古くから人々が生活していたことを知ることができます。その中で、特に注目されるのが小泉川の中流域に所在する伊賀寺遺跡です。

伊賀寺遺跡では、縄文時代中期から後期にかけての竪穴住居や土坑をはじめ、土壇墓や火葬墓など居住域と墓域とが一体となってみつき、縄文時代の集落の様子がわかる良好な遺跡として全国的に有名になっています。



南東上空から見た伊賀寺遺跡（小泉川北岸の段丘上に集落を営んでいます。）

玉と玉造り

玉は、耳や頸などの身体を飾るアクセサリーとしての役割とともに、邪悪なものから身を護る呪術的な力があると信じられていたようです。玉の使用は、古く2万年以上前の旧石器時代にさかのぼりますが、その数は乏しく、縄文時代、弥生時代、古墳時代と時代が下るにしたがって、形態や材質の種類、数量が豊富になっていきました。

伊賀寺遺跡では、碧玉製の玉類が出土し、縄文時代の玉造りを考える上で注目されました。碧玉は、濃い緑色をした非常に細かい結晶性の石英で、山陰や北陸など日本海沿岸地域で産出したものと考えられています。出土した玉は、中央に穴を開けた扁平な平玉で、未製品や素材となる石材の破片も数多く見つかったことから、この地で玉造りをしていたことが明らかになりました。

石器と石材

縄文時代の石器は、打ち欠いたままの打製石器と磨きを加えて仕上げた磨製石器とがあり、用途や機能によって形態や材質が異なっています。

伊賀寺遺跡からは、石斧、磨石、石皿、砥石、石棒、石鏃など各種類の石器や、石器を造る際に出た石屑などが数多く出土しています。石斧や磨石は、地元で産出した砂岩や粘板岩で造られていますが、遠隔地の石材を用いて造られた石器も少なくありません。

打製石鏃は、香川県の金山産や大阪と奈良の県境にある二上山産のサヌカイトで造られています。石棒は、和歌山県の紀ノ川もしくは徳島県の吉野川流域で産出する結晶片岩や緑泥片岩製です。その他、中部地方（長野県？）から運ばれて来たと考えられる黒曜石というガラス質の石材片も出土しています。

物の製作と移動

伊賀寺遺跡の調査では、様々な製品や原材料が遠隔地から運ばれたこと、日常の生活に不可欠な石器や玉類を造っていたことが明らかになりました。伊賀寺遺跡の縄文人たちは、狩猟と採集を生活の糧にしつつ、予想を上回るかなり広い範囲にまで移動を繰り返し、他地域の人々と活発に交流していたものと想像することができます。



碧玉製の玉類（上2列は平玉の未製品。穴を開ける途中で破損したものがあります。下3列は玉造りの際に出た石屑で、比較的細かく割れたものが多いようです。）



縄文時代の石鏃は、弥生時代の物と比べると、小さいものが多く、その多くは矢柄を着ける所が窪んでいます。下は、打製石器を作る際に出たサヌカイトの石屑。



右上は緑泥片岩製の石棒、右下は黒曜石の破片。どちらも遠隔地から持ち運び込まれたものと考えられます。左上の砥石と左下の磨石は砂岩製で、地元で取れた石材を使っている可能性が考えられます。